



営農情報 INFORMATION



★今月号は私が担当しました。

営農振興課
営農経済渉外係
近藤慎太郎

水稻の高温対策について

7月に入り、今年の夏もいよいよ本番を迎えます。温暖化の影響もあり、夏の猛暑は水稻に様々な悪影響を及ぼします。今回はそのような水稻の高温障害の対策について、改めて取り上げたいと思います。

○水稻の高温障害について

近年の夏の異常高温により、水稻の不稔、胴割粒、白未熟粒等の被害が発生しており、これらを総称して高温障害と呼んでいます。

白未熟粒は、出穂20日後の平均気温が27℃以上になると増加すると言われています。白未熟粒が増加すると検査等級が低下しますので、発生を軽減するための対策が必須となっています。

高温対策はいくつかありますが、水稻では追肥（穂肥）の実施が効果的であることが分かっています。追肥は白未熟粒の発生を軽減するだけでなく、葉や根の活力を増進させる効果もあります。

○葉色診断の実施

追肥の実施判断をするため、カラススケール（葉色板）を用いた葉色診断を実施しましょう。葉色診断に基づく適期・適量の追肥の実施が重要となります。カラススケールで葉色を見る場合、単葉と群落の方法があります。単葉の場合は、株の中の主茎あるいは主茎に準ずる太い茎の完全展開第2葉で、カラススケールから1cm程度離して測定します。群落の場合は、太陽を背にし、カラススケールから3m程度離れて測定します。



群落での葉色診断の様子

各肥料と施肥目安量

区分	品名	荷姿	10aあたりの 施肥目安量
追肥	オール14	20kg	0.7袋
追肥	化成17-0-17	20kg	0.6袋

追肥時期は品種により異なりますが、「彩のきずな」であれば出穂20～25日前を目安に葉色診断を実施し、測定した葉色が4・0未満の圃場では、窒素量で10aあたり2kg程度の施肥を行います。

また、基肥にケイカル等のケイ酸資材を施肥することも重要な高温対策となります。ケイ酸資材は稲の蒸散を活発にし、体温を下げる効果があります。また、倒伏防止やガス害の発生軽減の効果もあります。

○おわりに

水稻の高温対策は、基本技術の積み重ねしかありません。今回は主に追肥の実施を取り上げましたが、自身のほ場の状態を良く把握した上で、土づくりや育苗も含めた総合的な対策を実施することが重要となります。

JAふかやでは葉色診断を実施しています。カラススケールを持参して組合員のみなさまのほ場へお伺いしますので、ご希望の方はお気軽に営農経済部営農振興課（TEL：048-574-1159）までご連絡ください。

近年、省力化の観点から「基肥一発肥料」の普及が進んでいます。長期的に肥効が持続するため非常に便利ですが、高温下では肥料の溶出が早まり、追肥としての効果が不足する可能性があるとの見方もあります。元肥一発肥料を施肥したからといって安心せず、葉色診断を実施して追肥の必要があるかどうかを確認しましょう。